

看護大学生の「親になること」に関する意識

四宮美佐恵¹⁾*・安田陽子¹⁾・高尾 緑¹⁾・平田知子²⁾

1) 新見公立大学助産学専攻科 2) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2021年9月22日受付、11月17日受理)

本研究は、看護大学生の男女が「親になること」をどのように意識しているかを明らかにし、青年期の男女に対する教育の示唆を得ることを目的とした。方法は、A大学看護学科2019年度・2020年度の2年生146名を対象に、自記式質問紙調査を実施し内容分析を行った。その結果、【子どもを教育・養育するための経済力が必要】【子どもを育てる環境を整え無償の愛情を注ぐ】【子どもが生きがいになる】【人生の転機】【親としての社会的責任が重くなる】【親になることによる負担感】の6カテゴリーを抽出した。看護大学生は、親になることは、経済的に自立し、子どもを育てる環境を整えることが必要であること、親になることによって生じる自己犠牲や負担感、そして不安を意識しながらも、子どもと一緒に親として成長していくことができ、楽しみでもあると意識していることが明らかになった。そこで、親になることの意味や価値について教育することの必要性が示唆された。

(キーワード) 看護大学生、親になること、親性、意識

I はじめに

青年期は、近い将来、親になろうとしている発達段階として、親性を獲得する重要な時期である。「親性」とは、乳幼児への好意感情、養育の意思、知識と技能など、子どもと関わる上で重要な性質であり、生物学的性差によらず、男女において存在する性質である¹⁾。「親性」の概念が示されて以来、親になる準備段階にある青年期の男女を対象に、親になることへの意識や態度について研究が行われてきた。その結果、高校生よりも大学生など年齢が高くなるにつれて子どもや子育てに関心を抱いていたり、子どもに対して好感情を抱いていたりすること、乳幼児に接した経験や望ましい家族関係が子育てに対する意識に影響を及ぼしていることが指摘されている²⁾。しかし、これらの先行研究では、青年期の男女が「親になること」をどのように意識しているかについては十分な検討がなされていない。また、後藤は、「大学生にとっての『親になること』に関する意識や、育児負担に関する意識、『親になること』と結婚についての意識などに、アンビバレントな態度が見られた。その要因は、自分が将来親になるだろうと思いつながら、その姿を想像したり、自信を持ったりできないのは、責任感があること、十分な経済力、子どもを育てる力があること、十分な居住環境、社会的な常識を持っていることなど『親になること』の条件」を高く考え、『完璧な親』を目指している事である。」と述べている³⁾。岡本は、今日の社会変動の中で、子どもたちは将来、自分が親となるイメ

ージを簡単に描けなくなっており、成長過程において、親となる資質を育む心理社会的環境が崩れつつあることを指摘している⁴⁾。さらに、後藤は、青年期の課題として「親になること」を学ぶ必要性をあげており、それは、社会的に開かれた存在として「生命」と向き合い「自己」に出会い「他者と共に生きる」ことを学ぶことでもある⁵⁾。として、「親になること」について学ぶことの必要性について述べている。そこで、青年期のキャリア教育として「親になること」の意味や価値を問い、自分の一生をどう自立的に生きるかを検討することが必要ではないかと考える。本研究では、20歳前後の青年期は、アイデンティティが確立する時期であり、将来自分が親になることを考えはじめる時期でもあると捉え、特に看護大学生の2年生は、母性看護学概論の講義で「親になること」について学習をするため講義を受ける前に、「親になること」についてどのように意識しているかを明らかにするために、看護大学生の2年生を対象とし、親になる準備段階にある青年期の男女に対する教育の示唆を得ることを目的とした。

II 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象者

A大学看護学科2019年度2年生64(男子5)名、2020年度2年生81(男子12)名 計145名

*連絡先：四宮美佐恵 新見公立大学助産学専攻科 718-8585 新見市西方1263-2

3. 研究期間

2019年4月から2020年4月

4. 調査方法

(1) 調査内容

研究者の講義内容「親になること」の講義を始める前に、質問内容として「親になること」をどのように意識しているかについて自分の考えを記述することを説明し、その場で記述して頂き記述が終了するまで待ち回収した。講義出席者全員に提出を求め、レポート提出時は記名としたが、同意の有無を確認後「同意しない」学生のレポートは削除し、「同意する」学生のレポートは個人名を匿名化し、記述内容を研究に使用した。

(2) 分析方法

調査で得られた記述的データをもとに内容を「親になること」に注目し、コードをつけた。コードを意味内容の類似性と異質性を比較しながら分類しサブカテゴリーとした。さらに抽象度を上げながらカテゴリーを抽出しその内容を分析した。分析内容の妥当性と信頼性を確保するために、分析の過程を母性看護学、助産学の研究者4名で行った。

(3) 用語の定義

- ①親性：乳幼児への好意感情、養育の意思、知識と技能など、子どもと関わる上で重要な性質であり、生物学的性差によらず、男女において存在する性質とする。
- ②親になること：他者依存にある子どもを自分と同じように愛し、保護し、世話をするなど、次世代の養育以外に共生的存在の感受、他者と共に生きていくこととする。

III 倫理的配慮

研究対象者に研究目的、方法、個人情報保護、研究参加は、自由意思であり、内容が成績に影響することはないこと、協力をしなくても不利益を被ることはないこと、また、「同意書」提出後は、レポートの個人名を匿名化して研究に使用するため、同意後の「同意撤回」はできないことを文書及び口頭で説明し、同意書に署名をして頂いた。なお、本研究は新見公立大学倫理審査委員会の承認（承認番号：206）を得て実施した。

IV 結果

1. 対象の属性

対象者全員から同意が得られた。

2019年度2年生、女子59名、男子5名、2020年度2年生、女子69名、男子12名 合計145名。

2. 「親になること」に関する意識

看護大学生が「親になること」をどのように意識しているかについて内容分析を行った結果、499コード、16サブカテゴリー、6カテゴリーを抽出された（表1）。以下それぞれのカテゴリーを説明していく。文中の表記については、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、コードを<>で表す。

1) 【子どもを教育・養育するための経済力が必要】

【子どもを教育・養育するための経済力が必要】は、[経済力が必要][教育費・養育費が必要]の2つのサブカテゴリーから構成され、[経済力が必要]では、<お金と時間がかかる><経済力が必要><経済的な自立ができていない><生活が成り立つ生活費が必要><安定した収入が必要>、[教育費・養育費が必要]では、<教育費・養育費が必要>等、子どもに必要な教育を受けさせ、養育するためには、経済的に自立していることが必要であることを意識していた。

2) 【子どもを育てる環境を整え、無償の愛情を注ぐ】

【子どもを育てる環境を整え、無償の愛情を注ぐ】は、[子どもを守り育てる][子どもへの無償の愛情][子育ての環境]の3つのサブカテゴリーから構成され、[子どもを守り育てる]では、<子どもを育てなければならない><子どもを守らなければならない><守られる側から守る側になる><子どもを自分が死ぬまで見守る覚悟が必要><1人の人間を育てる><子どもが自分の命より大切な存在になる>、[子どもへの無償の愛情]では、<子どもに無償の愛情を注ぎ何も見返りを求めない><愛情を持ち子どもの成長を見届ける><子どもを何より最優先に考える><一番の理解者でいつも見方である><自分の生活が子ども中心になる>、[子育ての環境]では、<子どもの健康に気を遣う><食生活を見直す><しっかりと栄養バランスのとれた食事をつくる><子どもを育てる環境を整えなければならない><悩みが言えるような環境を作る><夫婦間の仲がより深まる>等、子どもを育てるための環境を整え、自分のことより子どものことを優先して、子どもに無償の愛情を注ぐことが必要であることを意識していた。

3) 【親としての社会的責任が重くなる】

【親としての社会的責任が重くなる】は、[子どもを教育できる知識・教養が必要][常識やルール、マナーを教える][子どもの見本となる][親としての責任]の4つのサブカテゴリーから構成され、[子どもを教育できる知識・教養が必要]では、<子どもを教育できる知識・教養が必要><子どもを教育する力が必要><日々勉強>、[常識やルール、マナーを教える]では、<子どもをしっかり躾ける><人間的・学問的教育、躾が必要><正しく叱れるよう

になる><常識やルール、マナーを教える><子どもには社会生活を営むための礼儀などを教育することが必要>、[子どもの見本となる]では、<子どもの見本となる><子どもは親をみて育つという認識をする必要がある><子どもや社会に認めてもらえるような行動をする><社会から一人前と認められる必要がある>、[親としての責任感]では、<親としての責任が必要><責任感が強くなる><自分が頼る側から頼られる側になる>等、子どもに社会生活を営むための礼儀などを教育することと自分の子どもに責任を持たなければならないことを意識していた。

4) 【親になることによる負担感】

【親になることによる負担感】は、[自己犠牲と負担感][忍耐力と強さ][子育てに対する不安]の3つのサブカテゴリーから構成され、[自己犠牲と負担感]では、<時間の制約が多くなる><生活リズムや環境が変化する><自己犠牲><負担が増える><肉体的・精神的に疲れる><子育てをするうえで発生する苦勞>、[忍耐力と強さ]では、<強くなる><たくさんの壁におち当たりながら強くなる><体力勝負><大変なこと、辛いことが多い><仕事と家事・育児の両立が大変><忍耐力が必要><親は多少自分のことを我慢する必要がある>、[子育てに対する不安]では、<子育てに対する不安><心配事が絶えない事>等、親になることは、自分の事だけでなく、子どもの事を考え、時には、時間の制約が多くなることで、自分の自由な時間が無くなり、自己犠牲を強いられることを考え忍耐力と強さが必要であることを意識していた。

5) 【子どもが生きがいになる】

【子どもが生きがいになる】は、[子どもが生きがいになる][子どもが癒しになる]の2つのサブカテゴリーから構成され、[子どもが生きがいになる]では、<楽しみが増える><子どもが成長することの喜び><子どもを育てることが生きがいに繋がる>、[子どもが癒しになる]では、<子どもが癒しになる><わが子が一番かわいい><子どもと一緒に親として成長していく>等、子どもを育てることが生きがいとなり、自分も人間的に成長できることを意識していた。

6) 【人生の転機】

【人生の転機】は、[親の気持ちを知り親孝行をする][人生の転機]の2つのカテゴリーから構成され、[親の気持ちを知り親孝行をする]では、<親の気持ちを知り親孝行をする><親になって両親への感謝と尊敬の気持ちが強くなる>、[人生の転機]では、<親として新しい人間関係ができる><親同士での交流を深めて周りの情報を得る><人生の転機>等、親になってはじめて、両親への感謝と尊

敬の気持ちが強くなり、親になるかならないかで自分の人生が大きく変わることを意識していた。

V 考察

看護大学生の「親になること」に関する意識は6つのカテゴリーが抽出された。その中で、【子どもを教育・養育するための経済力が必要】と【子どもを育てる環境を整え、無償の愛情を注ぐ】は、親になるために必要な条件を意識していると考察し、親になることに関する要件的な意識とした。【親としての社会的責任が重くなる】と【親になることによる負担感】は、親になることへの漠然とした「負担感」や「不安感」などを避けたいと意識していると考察し、親になることに関する回避感情的な意識とした。【子どもが生きがいになる】と【人生の転機】は、親になることを肯定的に受け止め意識していると考察し、親になることに関する肯定的な意識としてとして考察する。

1. 親になることに関する要件的な意識

【子どもを教育・養育するための経済力が必要】については、<安定した収入が必要><教育費・養育費が必要>とあるように、子どもに必要な教育を受けさせ、養育するためには、経済的に自立していることが必要であることを意識していた。服部の研究においても、大学生が考える「親になる」ということは、子どもを持ち家族を形成し、子どもを養育することが中心となっていることが明らかになっている⁶⁾。【子どもを育てる環境を整え、無償の愛情を注ぐ】については、<子どもが自分の命より大切な存在>のように、親になることは、子どもを「自分の命より大切でかけがえのない」存在として大切にすることであると意識しているのではないかと考える。このことは、「親になる」という他者との親密な関係を築いていくことの大切さを認識することに繋がるのではないかと考える。また、現在は学生であり、親に守られ大切に育てられていることを実感しながら、将来親となる自分も同じように<守られる側から守る側になる>のように、自分自身が守られる立場から、守る立場にならなければならない、責任が重くなることを意識しているのではないかと考える。<子どもを何より最優先に考える>では、自分のことではなく子どものことを優先させ、どのようなことがあってもお互いに「かけがえのない」存在である子どもに無償の愛情を注ぎ、何も見返りを求めないことを意識していることが考えられる。また、[子育ての環境]では子どもを良い環境で育てることが必要であると考え、そのためには<子どもの健康に気を遣う>ことが必要であり、現在の自分自身の<食生活を見直す>ことや、生活環境を整えることが必要であると考えているように、親になることは、自分中心から他者中心に変わっていくことを意識していると推察する。後藤は、自分が将来親になるだろうと思いながら、その姿を想像した

り、自信を持ったりできないのは、責任感があること、十分な経済力、子どもを育てる力があること、十分な居住環境、社会的な常識を持っていることなど『親になる条件』を高く考え、『完璧な親』を目指している事である。」と述べている³⁾。このように、経済的に自立し、子どもをかけたえのない大切な存在として慈しみ育てなければならぬと、親になることの要件を高く意識していることが推察される。

2. 親になることに関する回避感情的な意識

【親としての社会的責任が重くなる】については、<子どもを教育できる知識・教養が必要><子どもを教育する力が必要>とあるように、子どもが生きていくうえで必要な知識や技術を身に付けさせるためには、親がその知識や技術を持っていないと意識しているのではないかと考える。また、<子どもをしっかり躾ける><正しく叱れるようになる><常識やルール、マナーを教える>、<子どもの見本となる><子どもや社会に認められるような行動をする>等から、子どもに社会性を身に付けさせることが必要であると意識していることが推察される。子どもに社会性を身に付けさせるためには、自分自身が社会性を身に付けていなければならないが、今の自分はどうであるか、ともすれば子どもに教えるだけの知識や・教養が十分でないことを意識しているのではないかと推察する。小島は、「子育ての究極の目標は子どもの社会化にあると考える。つまり、わが子が社会で適応的に生きていくのに必要な知識や価値観、あるいはそれに基づく立ち振る舞い方を身に付けられるよう親が手助けする過程こそ、子育ての本質と考える」と述べている⁷⁾。このように、「親になる」には、親が多く知識や適切な行動様式を身に付けておく必要があることを意識していることが推察される。これは、社会の価値観にとらわれ「完璧な親」にならなければ「親になれない」ことを意識しているのではないかと考える。【親としての責任感】では、<親としての責任が必要><責任感が強くなる><自分が頼る側から頼られる側になる>等、自分の子どもに責任を持たなければならないことを意識していると考えられる。子どもを育てることは、親の責任であるという養育観を強く持っているためにより「親になること」を難しくしていることも考えられる。【親になることによる負担感】においては、<時間の制約が多くなる><生活リズムや環境が変化する><自己犠牲><負担が増える>から、親になることは、自分の事だけでなく、子どもの事を考え、時には、時間の制約が多くなり、自分の自由が制限されることに対して、負担を感じながらも、自分を犠牲にして子どもを守らなければならないことを意識していると考えられる。また、共働きが増加してきていること、今回の調査対象者が将来看護師になることを目指している学生であることより、結婚・出産後も看護師の仕事で

続けていきたいと考えていることが推察され<仕事と家事・育児の両立が大変>のように、仕事と家事・育児を両立することを考えると、親になることを負担に感じることは当然のことであると考えられる。また、核家族化に伴い、<子育てに対する不安>を感じ、自分が子どもを育てていくことができるのかと不安を意識していることが推察される。これらのことより、親になることによって社会的な責任が増したり、自由が制限され自己犠牲が強いられるなどといった親になることへの「負担感」や漠然とした不安などの「不安感」などの親になることへの回避感情的な意識をしていることが推察される。

3. 親になることに関する肯定的な意識

【子どもが生きがいとなる】については、<楽しみが増える><子どもが成長することの喜び><子どもが生きがいになる><子どもが癒しになる><子どもと一緒に親として成長していく>等、呉は、親になるということは、他者依存にある子どもを自分と同じように愛し、保護し、世話をするなど、次世代の養育以外に共生的存在の感受、他者と共に生きていくことであり、人間的に成長することであると述べている⁸⁾。今回の結果より、看護大学生は、親になることを、子どもを育てることが生きがいとなり、自分も人間的に成長できると考え、親になることへの意味や価値を見出し肯定的に受け止めているのではないかと考える。また、河野は、子育ての長い過程において、親はその命に責任を持つこと、他者を受容すること、寛大であることなど「成熟した」大人として必要な資質を獲得しつつ、生涯にわたる人格的な成長をすると述べている⁹⁾。【人生の転機】については、<親の気持ちを知り親孝行をする><親になっではじめて、両親への感謝と尊敬の気持ちが強くなる>のように、自分の子どもを育てることで、自分も両親に大切に育てられたことを振り返り感謝の思いが湧いてくることを意識していると考えられる。【人生の転機】では、<人生の転機><親として新しい人間関係ができる>より、親になることは、自分の人生の転機となり、自分の人生が自分だけのものではなく、子どものために生きるということによって自分の人生が大きく変わることを肯定的に意識していることが推察される。後藤は、「「親になること」はすでに親になる資格を持った大人が子どもを「育てる」というタテの関係ではなく、子のよりよい成長を願い、環境を整えて子どもの育ちを支援することを通して自らも変容していくという、時空間を通じた関係である」と述べている¹⁰⁾。今回の調査では、看護大学生は、「親になること」を、他者との関係性であると理解し、自分自身の親との関係性を振り返りながら、自分も将来自分の子どもとの関係性を通して成長していく事ができると考えているのではないかと推察する。

以上のことより、看護大学生の「親になること」に関す

る意識は、経済的に自立し、子どもをかけがえのない大切な存在として慈しみ育てなければならないことを意識した要件的な意識が抽出されると同時に、親になることによって社会的な責任が増したり、自由が制限され自己犠牲が強いられるなどといった親になることへの「負担感」や漠然とした不安などの「不安感」などの親になることへの回避感情的な意識が抽出された。しかし、「人間的に成長できる」「楽しみが増える、幸福感を得る」といった親になることへの意味や価値を意識した肯定的な意識も抽出された。このことより、大学生は、「個」としての自分の変化に対する不安感や自分が受ける制限に対する負担感を意識する一方で、親になることの意味や価値を意識しているのではないかと考える。そこで、今後青年期のキャリア教育として「親になること」の意味や価値について教育することの必要性が示唆された。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、看護大学生の男女が「親になること」をどのように意識しているかを明らかにし、親になる準備段階にある青年期の男女に対する教育の示唆を得ることを目的として調査を行った。その結果、「親になること」とは、経済的に自立し、子どもをかけがえのない大切な存在として慈しみ育てなければならない。また、社会的な責任が増したり、自由が制限され自己犠牲が強いられるなどといった親になることへの「負担感」や漠然とした不安などの「不安感」を意識しながらも、「人間的に成長できる」「楽しみが増える、幸福感を得る」といった親になることへの意味や価値を意識した肯定的な意識も明らかになった。しかし、対象者が、看護大学生に限定し、女性が9割を占めていたことより、一般化することはできない。今後は、一般の青年期の男女を対象に調査を行い、青年期のキャリア教育として「親になること」の意味や価値を問い、自分の一生をどう自立的に生きるかを考える機会を持つとともに、子育て支援に関する制度について理解したり、家庭を形成することも含めながら働き方や生き方を考えていくことが出来るような具体的な教育内容を検討していきたい。

本研究における利益相反における開示事項はありません。

謝辞

本研究にご協力いただいたA大学健康科学部看護学科2019年度、2020年度の2年生の皆様へ感謝申し上げます。

文献

- 1) 佐々木綾子,末原君代,町浦美智子,他4名: 青年期の親性をそだてる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究-心理・生理・内分泌学的指標による検討-福井大学医学部研究雑誌, 8 (1), 17-29, 2007.
- 2) 松岡知子,堀内寛子,山中亜紀,伊藤倫子: 男女大学生の親になることに関する意識. 母性衛生, 42 (4), 398-404, 2000.
- 3) 後藤さゆり他: 青年期のための「親になること」を通じた次世代教育プログラムの検討. 共愛学園前橋国際大学論文集, 12, 75-80, 2012.
- 4) 岡本祐子,古賀真紀子: 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究, 4, 159-172, 2004.
- 5) 後藤さゆり, 奥田雄一郎, 呉宣児, 平岡さつき, 大森昭生: 青年期における「親になること」の教育的意義の検討. 共愛学園前橋国際大学論文集, 10号, 207-218, 2010.
- 6) 服部律子: 大学生の親になることに対する意識. 思春期学, 26, (2), 261-267, 2008.
- 7) 小島康生: 「親になること」再考-子育ての生態学序説-. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 13 (1), 1-10, 2013.
- 8) 呉宣児,後藤さゆり, 平岡さつき, 大森昭生, 前田由美子: 大学生の「結婚すること・親になること」のイメージ-半構造化インタビュー調査を通して-. 共愛学園前橋国際大学論文集, 12, 43-53, 2012.
- 9) 河野利津子: 親役割に関する研究 (IV) -親であること (parenthood) と成人としての発達-. 比治山女子短期大学紀要, 33, 1-12, 1998.
- 10) 後藤さゆり他: 青年期のための「親になること」を通じた次世代教育プログラムの検討. 共愛学園前橋国際大学論文集, 12, 81-89, 2012.

表 1. 親になることに関する意識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (n=499)
子どもを教育・養育するための経済力が必要	経済力が必要	お金と時間がかかる(10) 経済力が必要(16) 経済的な自立ができていない(3) 生活が成り立つ生活費が必要(5) 安定した収入が必要(18)
	教育費・養育費が必要	教育費・養育費が必要(15)
子どもを育てる環境を整え無償の愛情を注ぐ	子どもを守り育てる	子どもを育てなければならぬ(12) 子どもを守らなければならぬ(14) 守られる側から守る側になる(14) 子どもを自分が死ぬまで見守る覚悟が必要(5) 1人の人間を育てる(8) 子どもが自分の命より大切な存在になる(5)
	子どもへの無償の愛情	子どもに無償の愛情を注ぎ何も見返りを求めない(12) 愛情を持ち子どもの成長を見届ける(9) 子どもを何より最優先に考える(11) 一番の理解者でいつも味方である(12) 自分の生活が子ども中心になる(6)
	子育ての環境	子どもの健康に気を遣う(5) 食生活を見直す(6) しっかりと栄養バランスのとれた食事をつくる(2) 子どもを育てる環境を整えなければならぬ(4) 悩みが言えるような環境を作る(4) 夫婦間の仲がより深まる(5)
	子どもを教育できる知識・教養が必要	子どもを教育できる知識・教養が必要(10) 子どもを教育する力が必要(8) 日々勉強(4)
親としての社会的責任が重くなる	常識やルール、マナーを教える	子どもをしっかり躾ける(5) 人間的・学問的教育、躾が必要となる(3) 正しく叱れるようになる(3) 常識やルール、マナーを教える(8) 子どもに社会生活を営むための礼儀などを教育する(7)
	子どもの見本となる	子どもの見本となる(4) 子どもは親を見て育つという認識をする必要がある(6) 子どもや社会に認めてもらえるような行動をする(4) 社会から一人前と認められる必要がある(4)
	親としての責任感	親としての責任が必要(15) 責任感が強くなる(16) 自分が頼る側から頼られる側になる(12)
親になることによる負担感	自己犠牲と負担感	時間の制約が多くなる(10) 生活リズムや環境が変化する(10) 自己犠牲(8) 負担が増える(13) 肉体的・精神的に疲れる(12) 子育てをする上で発生する苦勞(5) 強くなる(8)
	忍耐力と強さ	たくさんの壁にぶち当たりながら強くなる(8) 体力勝負(4) 大変なこと、辛いことが多い(5) 仕事と家事・育児の両立が大変(4) 忍耐力が必要(10) 親は多少自分の事を我慢する必要がある(4)
子どもが生きがいになる	子育てに対する不安	子育てに対する不安(8) 心配が絶えない事(7)
	子どもが生きがいになる	楽しみが増える(10) 子どもが成長することの喜び(8) 子どもを育てることが生きがいになる(11)
	子どもが癒しになる	子どもが癒しになる(8) わが子が一番かわいい(6) 子どもと一緒に親として成長していく(15)
人生の転機	親の気持ちを知り親孝行をする	親の気持ちを知り親孝行をする(5) 親になって両親へ感謝と尊敬の気持ちが強くなる
	人生の転機	親として新しい人間関係ができる(2) 親同士での交流を深めて周りの情報を得る 人生の転機(6)